

OU-VOICE 教養教育 ● magazine

● VOICE

● GP紹介

・「夢と希望と専門職 — 総合大学が担う教員養成の質保証 —」

● 特集

・「学士課程教育構築」

● シリーズ

・卒業生メッセージ

● 投稿

● 知ってますか？

2011

No.

13

目次

VOICE

- 社会にはばたく岡大生のためのキャリア開発センターを目指して
キャリア開発センター長（理事・副学長） 佐藤 豊信 1

GP 紹介

- 夢と希望と専門職 ― 総合大学が担う教員養成の質保証 ―
教師教育開発センター副センター長
大学院教育学研究科 教授 高橋 香代 4

特集

- 学士課程教育構築
今、なぜ学士課程教育構築なのか
教育開発センター 教授 橋本 勝 6
学士課程教育構築に向けて
学士課程教育構築 WG 座長
大学院医歯薬学総合研究科（薬学部） 教授 佐々木 健二 9

コーヒースタイル

- 工学部再編とコース制の新体制
大学院自然科学研究科（工学部） 教授 後藤 邦彰 14

シリーズ 卒業生メッセージ

- 大学生活10年目のメッセージ
東京理科大学基礎工学部電子応用工学科 助教
2009年 大学院自然科学研究科産業創成工学専攻修了 山口 富治 16
大学で過ごす瞬間（とき）
岡山大学事務職員 情報統括センター情報統括グループ
2005年 工学部情報工学科卒業 久保田 将弘 17

投稿

- 海外の教育紹介
中国の教育制度
言語教育センター 准教授 孫 路易 18

知ってますか？

- 自学自習スペース利用のすゝめ 20

編集後記

21

（注）役職等は、平成23年3月1日現在のものです。

社会にはばたく岡大生のための キャリア開発センターを目指して

キャリア開発センター長（理事・副学長）

佐藤 豊信

1. 就職情報室からキャリア支援室、

そしてキャリア開発センターへ

「新就職氷河期」というフレーズが、メディアを通して飛び交っている昨今。この危機的状況に伴い、2011年4月1日より、学生の社会的及び職業的自立を図るための内容が、大学設置基準及び短期大学設置基準に加えられます。これに先立ち、職業教育の義務化が示されるなど、いよいよ国も若者を取り巻く現代社会の厳しさを受け止め、対策に乗り出したものと思われまます。

本学では、このような国の動きよりも一足早く、キャリア支援に取り組んできました。その前身は、今から8年前の2003年、教育開発センター・キャリア教育研究開発部門における調査から始まり、その後は、担当部局が学生支援センター・キャリア支援室へと移管されました。そして、2010年8月1日には、キャリア開発センターとなり、全学センターとしてさらなる充実が図られたのです。

本学卒業生の8割は、民間企業に就職しています。彼らの中には、大学3年生にして人生で初めて就職活動を行い、いくつもの企業から不採用通知をもらい、人格までが否定されたのではないかと悩む学生も多くいます。それでも、お互いを励まし合い、社会人として認められようと頑張るのです。このような学生たちのためにも、キャリア支援室の開設当初から、「岡山大学で一番明るい場所に」をモットーに、教職員と学生が共に努力を続けてきました。そして、実際的なキャリア支援の導入に伴い、キャリア教育科目の充実、就職ガイダンスの充実、キャリア・アドバイザーの雇用による就職支援によって就職先も激変するという成果を上げてきました。（図1）

キャリア開発センターの設置は、本学が、今後ま

すますキャリア支援に力を注いで取り組む意思を示しております。そして、本センターは、単なる「就職のお世話をする所」ではなく、岡大生が社会人としての資質・能力を磨き、社会にはばたいていくための教育・支援を行っていく機関であることが求められています。

（図1）

就職実績（企業）

●就職者数上位20社 勤務地：全国規模の企業 西日本規模の企業 地元企業

平成18年度		平成21年度	
1. 中国銀行	26	1. 中国銀行	24
2. 両備システムズ	11	2. 西日本旅客鉄道（JR西日本）	14
3. NECシステムテクノロジー	10	3. 両備システムズ	11
4. 三菱電機	9	4. 三浦工業	9
5. 岡山村田製作所	8	5. 東京海上日動火災保険	8
6. キヤノン	8	6. 日本生命保険	8
7. 伊予銀行	7	7. デンソー	7
8. カワニシホールディングス	7	8. 三菱重工業	7
9. 塩野義製薬	7	9. 三菱電機	7
10. 天満屋	7	10. NTTデータ	6
11. 西日本電信電話（NTT西日本）	6	11. 中国電力	6
12. グロップ	6	12. マツダ	6
13. トヨタ自動車	6	13. 三井造船	6
14. シンフォーム	5	14. 両備ホールディングス	6
15. スズキ	5	15. 伊予銀行	5
16. セリオ東洋グループ	5	16. 岡山県信用保証協会	5
17. タイハツ工業	5	17. 武田薬品工業	5
18. デンソー	5	18. トヨタ自動車	5
19. ナカシマプロペラ	5	19. ナカシマプロペラ	5
20. 日本総合研究所	5	20. ナカシマメディカル	5

2. 岡大生の可能性を広げるキャリア開発を

(1) キャリア教育（共育）と就職支援との両輪で

本学では、「キャリア開発」は「キャリア教育（共育）」と「就職支援」との両輪であることを強調しています。というのも、我が国では「キャリア＝就職」としてとらえられがちですが、本来「キャリア」とは、「どのような仕事につくか？」という労働観から「どのように生きていくか？」という人生観まで、広くとらえなければならないからです。したがって、岡大生が現実社会というステージに立つための職業的な意味と、自らの人生そのものと向き合っていくための人格形成的な意味とが共に確立している必要があります。

そこで本学では、「キャリア教育（共育）」と「就職支援」の2つが相互に作用し合い、相乗効果を生み出すことを目指しているのです。

(2) 「自己実現」と「社会貢献」を目指すキャリア教育（共育）

本学のキャリア教育では、目指すべき教育目標（キャリア・ポリシー）として、「自己実現」と「社会貢献」を掲げています。

何よりも、本学*ディプロマ・ポリシーにも掲げられている「自己実現力」が示すように、一人ひとりの学生に自己実現が

保障されなければなりません。そのためには、学生自身の資質・能力を向上させていく必要があります。一方で、一人ひとりの学生には、社会人として社会から求められ、社会に貢献できるための力も必要とされているのです。したがって、本センターでは、学生自身が獲得・向上する力としてのベクトルと社会が求めている力としてのベクトルとが双方向関係にあると考えています。そして、「自己実現」と「社

「自己実現」と「社会貢献」のために求められる7つの力



*ディプロマ・ポリシー（4ページをご覧ください。）

(図3)



会貢献」との双方向関係の中に、本センターが学生に提供したいキャリア教育があるのです。

そこで、本センターでは（図2）のような7つの力を学生に獲得・向上してもらいたい力として提示しています。この人材力は、「所属学部の専門的な学問で得られる専門性」と「自主的に取り組む体験活動（部活動やサークル活動、アルバイト活動など）から得られる実践」を必要としています。

そして、この2つを結びつける役割を果たすのが、「キャリア関連授業科目」です。過去・現在・未来の自分自身を見つめ、人・自然・社会とのつながりを考えることで、専門的な学問や体験活動を自分の中にさらに深く内面化させていけるのです。そのためにも、各学年に対応した授業科目を「キャリア教育基礎科目」及び「キャリア教育実践科目」に大別して、体系的に位置づけています。さらに、総合演習や学部専門キャリア科目、課外活動などの自主的な体験活動とも連携して、より一層実践的な教育体系を作り出しています。この「キャリア関連授業科目」の全体像は、図3のとおりです。こうしたキャリア教育は、すでにキャリア支援室の頃から実施しており、上述の教育目標に基づいた成果についてもすでに実証されています。

(3) 共に悩み、共に歩む就職支援

キャリア開発センターでは、就職活動をいわゆる受験勉強的な位置づけにはしていません。むしろ、学生が在学中に社会を知り、自分自身を知ることのできる最も効果的なフィールド・ワークこそ就職活動であると考えているのです。だからこそ、学生の皆さんが就職活動を通して豊かに学び、自己実現もでき、社会人として自立していけるために支援することを目標としています。

そのためにも、一方的に就職のノウハウを教え込んだり、学生が依存しきるような支援をしたりすることはありません。本センターが提起しているキャリア・アドバイジングでは、学生の自己決定を優先しながら、共に方向性を探ることを前提としています。また、必要に応じて、方向性の修正を示唆することや基本的な技術・知識・方法を助言することもあります。その中で、学生が自身の視野や可能性を広げ、自立した就職活動を実践できるよう目指しているのです。(図4) そのためにも、本センターに配置しているキャリア・アドバイザーたちは、日々、専門性を高め、学生の状況を共有することに努めています。

ちなみに、2009年度は、年間7,006名がアドバイジングを受けました。同じく2009年度では、年間10回の就職ガイダンスや年間6回の文・法・経済各学部への就職セミナーをはじめ、資格取得講座(年間11回)や公務員試験説明会(年間19回)なども積極的に開催しています。また、学生側からも就職活動を盛り上げていこうと、「学生企画 就活オ・レ!」や「就活リーダーズ合宿」などの取組みも活発です。さらに、インターネットを活用した「岡大キャリア・ナビ」を設置し、学生が場所や時間を問わず就職情報を入手でき、先輩たちの就活体験を共有できるようにしています。

3. 社会にはばたく岡大生のために

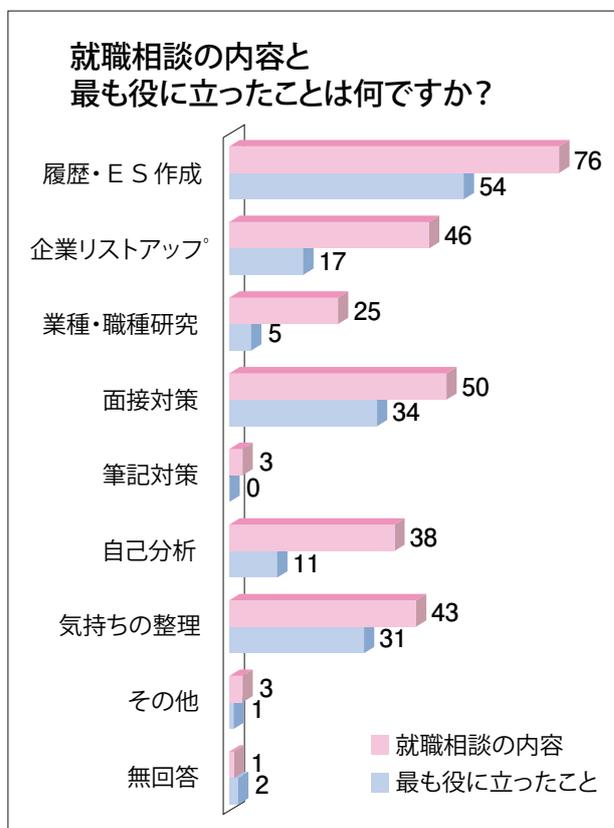
近年、全国区の手企業でも、本学卒業生の「まじめさ・粘り強さ・安定感」が高く評価されています。また、企業以外でも本学卒業生たちは、多方面

で活躍しています。本センターでは、学生の皆さんに、こうしたすばらしい先輩たちのことも知ってもらえたらと考えています。すでに、岡山、東京、沖縄、大阪などでは、卒業生たちが自主的にネットワークを作り、岡大生たちを迎える場を整えてくださっています。このような場で在學生⇄卒業生の関係をコーディネートするのも、本センターの重要な役割だと認識しております。

一足先に社会へはばたい先輩たちに憧れ、そんな自分が社会へはばたき、憧れられる先輩へと成長していく…。このような憧れの連鎖を強めていくことで、岡大生が社会に対する不安感よりも、社会へ挑戦できる喜びを抱けるようになってもらえればと強く願っています。

社会へはばたく岡大生のために、私たちキャリア開発センターができることは、まだまだたくさんありそうです。

(図4)



※ 2010年4月1日～8月31日に行ったアンケート調査の一つ。
この調査は、キャリア・アドバイスを利用し、進路が決定した86人の学生・院生を対象にしています。

夢と希望と専門職

— 総合大学が担う教員養成の質保証 —

教師教育開発センター副センター長
大学院教育学研究科 教授
高橋 香代

1. はじめに

岡山大学には、教育学部に加えて、文学部、法学部、経済学部、理学部、工学部、環境理工学部、農学部という教員免許を取得できる8つの課程認定学部があります。これまで教育学部以外の学部では、教員免許に必要な科目の単位を修得することはできませんでしたが、大学全体として教員養成の質を保証する仕組みは十分とは言えませんでした。

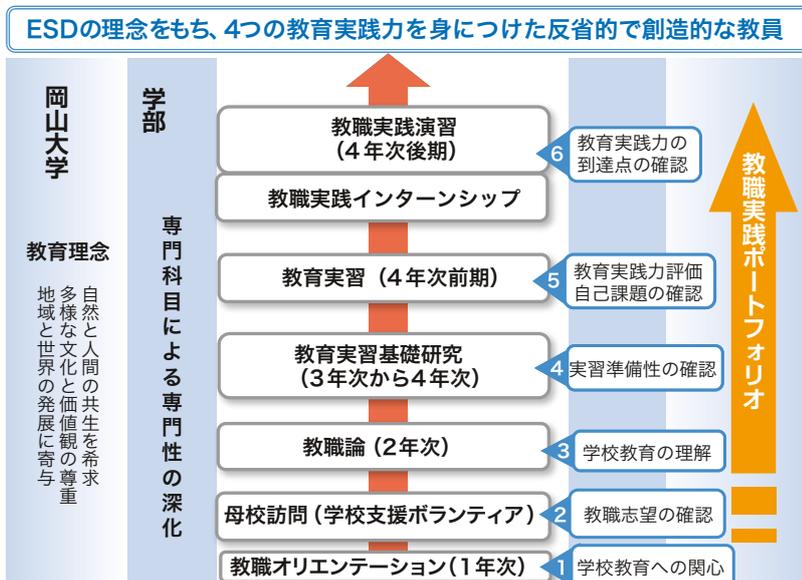
岡山大学教育学部では、2006年度より教育実習や体験的授業科目をコア（軸）にした「教員養成コア・カリキュラム」を開発して、バランスの取れた教育実践力を身につけた教員養成に取り組んできました。また2008年度には、中国地区で唯一の教職大学院を設置し、専門職養成としての教員養成教育を追究してきました。このような教育学部・教育学研究科での教育改革の成果を基盤に、全学教職課程の改善に取り組みました。

この取組が、2009年度文部科学省大学教育推進GP「総合大学が担う特色ある教員養成の質保証」として採択され、事業の中核を担う機関として2010年4月「岡山大学教師教育開発センター」を創設しました。学部の枠を超えて教員養成教育の改善に取り組む全学センターの設置は全国初となります。

2. 全学教職コア・カリキュラムで質を保証

岡山大学から21世紀に求められる資質能力を持った教員を輩出するために、全学教職課程のディプロマポリシー^{*}を「ESD (Education for Sustainable Development: 持続発展教育) の理念をもち、4つの力で構成される教育実践力をバランスよく身につけた反省的で創造的な教員」とし、全学教職コア・カリキュラム (図1) を構築しました。教育実践力とは、「学習指導力」、「生徒指導力」、「コーディ

(図1)



全学教職コア・カリキュラム (1から6の段階を教職実践ポートフォリオで自己評価)

※【ディプロマポリシー】

Diploma Policy. 卒業認定・学位授与に関する方針のこと。これまでの日本の大学はかつて入学試験の競争率が高く、入学が難しく卒業は比較的容易という傾向があった。2007年に「全入時代」を迎えることを受けて2004年12月に中央教育審議会がまとめた答申「我が国の高等教育の将来像 (中間報告)」で強調された言葉。報告では「出口管理の強化」の必要性を謳っており、アドミッションポリシー (入学者受け入れ方針) の明確化とともに、単位認定、卒業認定の条件を見直す必要があるとした。

ネット力」及び「マネジメント力」の4つの力で構成される総合的な教育実践の力量のことです。

全学教職コア・カリキュラムは、1年次から4年次の5期に分けて段階的に進めます。

まず1年次（教職への意欲向上期）は、7月に「教職オリエンテーション」で学校教育への関心を確認します。その後教職志望を確認するために、母校訪問（または学校支援ボランティア）を行います。

2年次（学校教育理解期）は、母校訪問などで教職への意欲を確認した後、教職科目「教職論」で、学校教育や教職の基本を理解します。

3年次（基礎的教育実践力養成期）は、「教育実習基礎研究」で、教育実習の前に必要な基礎的教育実践力を身につけます。

4年次（教育実践力養成期）の前期には、実習校で「教育実習」を行って学習指導・生徒指導・学級経営等の教育実践力を身につけます。後期には、「教職実践演習」で、自らの教育実践を振り返り課題を発見して、不足している力を身につける努力をして教育実践力をバランスよく身につけます。

このステップを確実に歩むことで、教員としての力をつけていくことができます。「教職実践ポートフォリオ」は、1年次から4年次を通して、自らの教育実践力を自己評価していく学びの目安です。

3. 教師教育開発センターの役割

教師教育開発センターでは、全学教職コア・カリキュラムの開発や運営をして、岡山大学全体の教員養成の質を保証する取り組みを進めています。2010年7月に開催した「教職オリエンテーション」



教職オリエンテーション

」(写真)では、1年生が熱心に参加しました。

また、採用試験対策や相談に応じる「教職相談室」の運営や、教育委員会との連携、学校支援ボランティアやインターンシップ事業を一元的に管理するスクール・ボランティア・ビューローの設置、教職実践ポートフォリオのWeb化、手引きや教科書作成にも取り組んでいます。これらの活動を通して、岡大生が、教員になる夢と希望をふくらませて、専門職として育ててくれることを願っています。

4. 親身になって支援する「教職相談室」

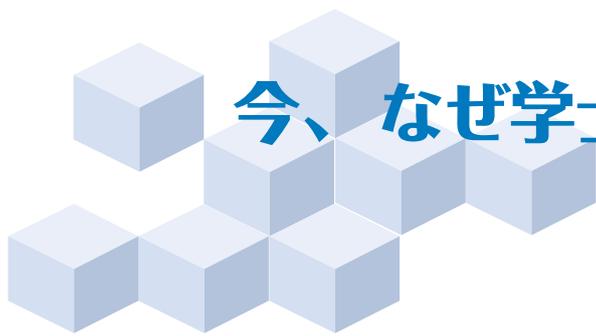
教職相談室では、教員採用試験情報の提供、論作文の添削、模擬面接・模擬授業指導などの教職支援活動を行っています。2010年度はこれまで延べ3,700人の学生が利用しています。教育学部以外の学生も積極的に利用しはじめています。10回以上の利用者は9割が教員採用試験に合格しています。

不登校、いじめ、虐待、発達障害の子どもたちへの対応、ケータイの問題やクレーマーなど現実の学校現場が直面している課題について、現職の校長先生の経験を聞き、話し合う「教師力養成講座」(図2)も定期的に開講しています。また、卒業後も、学級経営や初任者研修、学校内での人間関係などの相談に対応しています。指導している教授陣は、校長経験のある岡大の先輩です。親身になって支援してくれる先輩と一緒に、不安や悩みを乗り越えて専門職として成長し続けていきましょう。

(図2)



教師力養成講座



今、なぜ学士課程教育構築なのか

教育開発センター 教授
橋本 勝

1. 学士課程教育？

今、岡山大学では、学士課程教育の構築に向けて一大プロジェクトが進行中です。

「ガクシカテイ」と聞いても学外の人や入学間もない学生の皆さんにとってはピンと来ないかも知れませんが、ここ10年ほどの間に大学は大きく変わってきました。それを象徴する言葉の一つがこの学士課程教育です。

「国立大学の法人化」、「大学全入時代」といった言葉は皆さんの耳にも届いているでしょう。ひょっとすると「学士力」、「大学評価」などという言葉が印象にある人もいるかもしれませんね。従来、研究に偏っていた大学が本来の教育機関としての社会的使命を果たすために、その教育力を立て直す必要に迫られているのです。大学院重点化を行い、今後、研究にも力点を置く岡山大学は「教育と研究」の両方を視野に入れて大学を再構築していかねばならなくなっているわけです。

2008年12月24日に文部科学省の中央教育審議会(中教審)が『学士課程教育の構築に向けて』という答申書(以下、学士課程答申)をまとめました。中教審は大学だけではなく日本の教育制度や内容のあり方を徹底的に議論し、国(文部科学省)にその結果を報告する機関です。皆さん方の身近なところでは「ゆとり教育」を生み出したのも見直しを提言したのも中教審です。日本の教育の基本的方向性を作り出すところと考えればよいでしょう。

さて、その中教審が、各大学に対するクリスマスプレゼントのつもりだったのか、あるいは新年を前にたまったツケを請求するつもりだったのかは定かではありませんが、なぜか年末の押し詰まったこの時期にこの学士課程答申を発表したのです。

2. 学士課程教育の意味

中教審は、2005年9月の段階で、一度、審議経過報告として、『学士課程教育の再構築に向けて』をとりまとめましたが、この時、あちこちから疑問の声が上がりました。「再構築という以上は既に構築されていたはずだが、日本では学士課程教育などというものは存在しているのか」という疑問です。つまり、大学の先生たちにとっても、「学士課程教育?なんだ、それは?」という状況だったわけです。最終答申では、この疑問に答える形で「再」は取れて「構築」に直されました。つまり、学士課程教育はこれから作っていくものという認識が変わったわけです。

学士課程答申の原点になるのは、2007年1月に発表された『我が国の高等教育の将来像』答申(以下、将来像答申)でしたが、そこでは、学士課程教育の必要性が次のように説明されています。

「現在、大学は学部・学科や研究科といった組織に着目した整理がされている。今後は、教育の充実の観点から、学部・大学院を通じて、学士・修士・博士・専門職学位といった学位を与える課程(プログラム)中心の考え方に再整理していく必要がある。」つまり、学部・学科の縦割り体制が、ともすると学生本位の教育活動の展開を妨げてしまいがちなので、それを是正し、学部段階の教育を「学士」を与えるに値するものとして大学として構築し直そう、という考え方です。言い換えると、今までは、何を教えるかという教師目線だった教育を、何ができるようになったかという質的保証を目指す学生目線の教育に変えようとするものだと思えばよいと思います。

3. 学士課程教育と岡山大学

2001年の段階から、全国の大学に先駆けて学生参画型教育改善を本格化させていた岡山大学（この点については、例えば『OU-Voice』のNo. 9などを参照してください。）では、将来像答申・学士課程答申を通じて色濃く出ている「学生中心」、「学習者中心」という考え方は大学の方針とも一致するものでしたから、学士課程答申が出されると早速、それを実現するには具体的に何をどうすればよいかを検討し始めました。詳しくは、この後の佐々木先生の解説を読んでほしいのですが、要は、大学としてのディプロマポリシー（学位授与の方針）を軸に全教員が教育内容を根本的に見直し、それに合わせたカリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）に作り変え、あらためてアドミッションポリシー（入学者受入れの方針）を再構成するというものです。完成には数年を要する壮大な計画です。今の岡山大学の学生は、その大きな改革の真っ只中にいるわけです。

今までの大学は、専門的な知識や技能を教え、伝えるところでした。また、教員と一緒に特定の研究を進めるところでした。その結果、学問分野の細分化の中で、ともすると、ある特定の分野のことだけは詳しいが、21世紀をたくましく、またしなやかに生き抜くための総合的な力が不足しがちな人も少なくなく、岡山大学も決して例外ではありません。また、その一方で、多くの人が大学に進学するようになった今、単に「大学卒業」の資格取得だけが目的化し、大学教育にはほとんど何も期待しない学生たちや、研究のみが評価されるため教育に不熱心な教員たちの存在は、時として大学教育を形骸化し、大学が社会の非難的になることもあります。幸い、この面では、岡山大学は、上述の学生参画型教育改善の推進による主体的な学びや教育面なども含めた教員評価の推進を通じて教員層の教育改善意欲が他

大学に比べると進んでいます。それでもそういう面が全くないとは言えないのが実情です。

そこで、本学では、岡山大学の学生の一人ひとりに、将来の日本や世界を託せるような、バランスの取れた総合力を身につけてもらい、さすがに岡山大学の卒業生は一味も二味も違うという状況を作り出そうと、教育の全面的な見直しに着手し始めているわけです。

4. 岡山大学のディプロマポリシー（DP）

最初に取り組んだのは、大学としての学士保証を社会にアピールするためのディプロマポリシー（学位授与の方針）の設定です。約20人の教職員（学士課程教育構築ワーキンググループ委員）が何度も議論を重ね、たどり着いたのが下のような5つの力の育成という方針でした。学生が本学を卒業するにあたって、学部を問わず、これらの「学士力」を身につけ、社会の担い手としての「知の継承者」となることを大学として保証しようというわけです。

・人間性に富む豊かな教養【教養】

自然や社会の多様な問題に対して関心を持ち、主体的な問題解決に向けての論理的思考力・判断力・創造力を有し、先人の足跡に学び、人間性や倫理観に裏打ちされた豊かな教養を身につけている。

・目的につながる専門性【専門性】

専門的学識と次代を担う技術を身につけていると共に、それらと自然・社会とのつながりを意識し、社会に貢献できる。

・効果的に活用できる情報力【情報力】

必要に応じて自ら情報を収集・分析し、正しく活用できる能力を有すると共に、効果的に情報発信できる。

・時代と社会をリードする行動力【行動力】

グローバル化に対応した国際感覚や言語力と共に、社会生活に求められるコミュニケーション能力を有し、地球規模から地域社会に至る共生のために、的確に行動できる。

・生涯に亘る自己実現力【自己実現力】

スポーツ・文化活動等に親しむことを含めて、自立した個人として日々を享受する姿勢を一層高め、生涯に亘って自己の成長を追求できる。

(2010年4月19日 学長裁定)

これを受けて、約70人のファカルティーコーディネーター（FC）と呼ばれる各学部の教育改革の推進中核メンバーが、これに基礎を置く各学部のDPも作りまし、大学で開講されている全ての科目が、これとどう関わっているのかを検証する作業にも既に着手しています。また、それらを効率的に進めるためにシステム開発も行っています。これらの詳しい紹介は、学士課程教育構築ワーキンググループの責任者の佐々木先生に譲ることにしましょう。

ここでは、最後に、こうした改革の進行の中で、皆さん方に心がけてほしいことを2つだけ挙げて私の文章の結びとします。

5. 学士課程教育構築にどう向き合うべきか

高校時代はもちろん入学してしばらくの間、皆さん方は、大学が高校までの学校と本質的に異なることに気づきにくいものです。違いは「勉強」（強制された勉学）と「学問」（主体的な学び）にあります。かつての日本人は、前者の学びに終始する student を「生徒」、後者の学びの喜びに気づいた student を「学生」と呼んでこの2つを明確に区別していましたが、近年、この区別がよくわからない人たちが増えつつあります。

大学の先生の大半は教員免許など持っておらず、教育方法のトレーニングなどほとんど受けないまま教壇に立っていることを知っていますか。それは、大学とは学ぶ側が勝手に学ぶところであって、教員はそれを支援すればよいからです。最近、成り立ちにくくなった授業を何とかしようと教員の教育力を高める試みも活発化していますが、本来の大学像からすると、より本質的に変わる必要があるのは学生です。教員と学生が一緒になって知的探求をするところに大学での学びの本質があるのです。学士課程教育が実現すれば、あるいは、それに向けて変わろうとすれば、教育内容は自ずと、主体的な学びを誘発するものになっていきます。ですから、それを上手く感じ取って、生徒から学生へいち早く脱皮してください。以前よりはそうした進化がしやすくなっているはずですが、これが、心がけてほしいことの1点目です。

もう1つは、学びを広く捉えてほしいということです。もう一度、岡山大学のディプロマポリシーをよく見てください。5番目の自己実現力は課外活動や社会活動を積極的に行うことで卒業後も生涯学習を継続できる人材の育成を狙ったものです。学びは授業の中にのみあるものではありません。生きていること全てが学びにつながると言っても過言ではありません。友人や教師との何気ない会話の中にさえ、潜在的な能力開発の芽が潜んでいるのです。大学が学びを広く捉えようとしているのに、皆さん方が狭い学習観にとらわれていては伸びるはずの力も伸びません。逆に言えば、皆さん方がその気になれば、本学のディプロマポリシーの実現もより確実にあります。

大学ではしばらく試行錯誤が続きます。それを上手く進められるかどうかは皆さん方にもかかっているわけです。大学の最大構成員である皆さん方がこの大きな変革と一緒に進めてくれることを期待しています。

学士課程教育構築に向けて

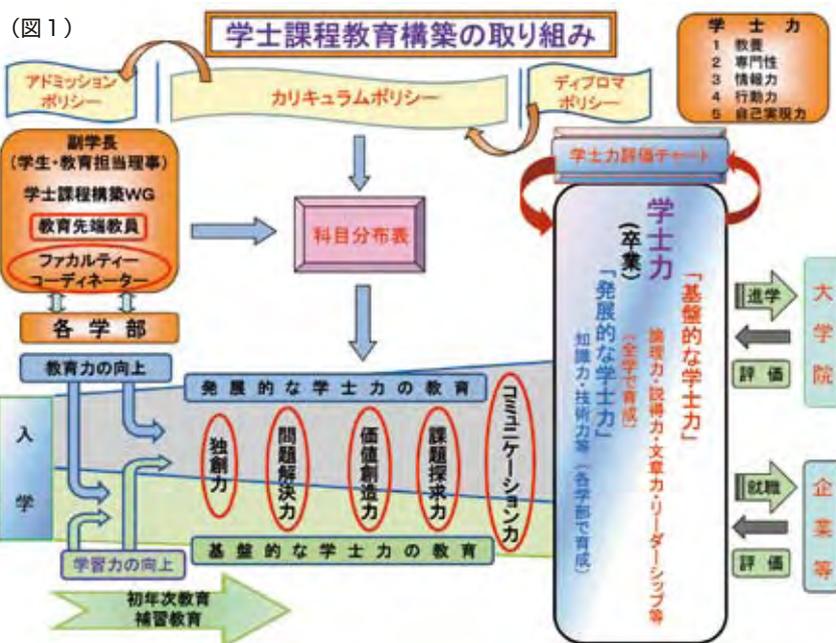
学士課程教育構築WG座長
大学院医歯薬学総合研究科（薬学部）教授
佐々木 健二

学生主体の考え方で大学の教育プログラムを整理するようという、2008年12月24日付けの中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」の提言を受けて、本学も本格的に学士課程教育構築の検討を行うべく動き出し、本学教育・学生担当理事の佐藤副学長から学士課程教育構築WGの取り纏めの依頼を受けたのは、中教審の答申があつて間もなくのことでした。筆者が全学のFD委員会委員長をしていることもあつての指名だったのですが、著者自身、この学士課程教育構築には関心があつたので引き受けさせて頂き、早速、学士課程教育構築WGを立ち上げると共に、本学の「学士課程教育の構築に向けて」取り組みを開始した次第です。以下にその取り組みの詳細について述べさせて頂きます。

1. 学士課程教育構築の取り組みの概略

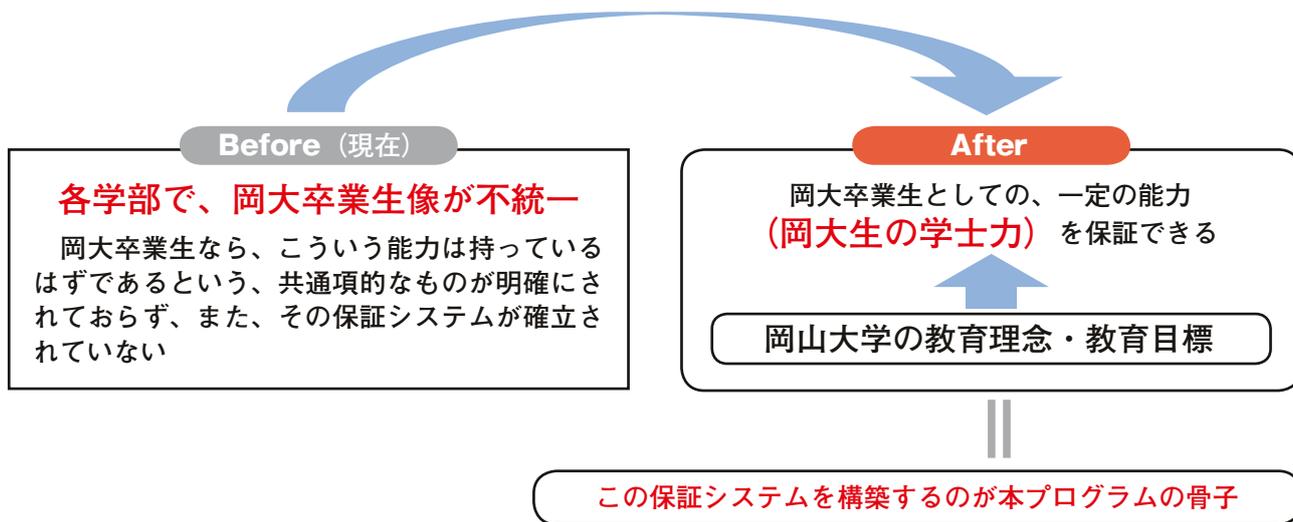
本取り組みは到達目標を明確にして（ディプロマポリシーの明確化）、カリキュラムを編成（カリキュラムポリシーの再構築、カリキュラムマップの作成）し、育てたい卒業生像にふさわしい資質を持った入学者を受け入れるための方針を示す（アドミッシ

ョンポリシーの明確化）という出口から入口への流れに沿って、岡山大学における学士教育課程構築に向けてのロードマップを策定すると共に、そのための組織作りを行い、岡山大学の教育理念に合致した一定の能力（学士力）を有する卒業生を送り出す保証システムを構築しようとするものです。（図1）



(図2)

学士課程教育構築完成後



2. 学士課程教育構築の取り組みの

具体的な目的は？

本学ではAO入試の実施、カリキュラムの刷新、GPA制度の導入といった改革は行われていますが、それぞれの管轄組織や個々の目的が異なることもあり、大学全体としていかに個性化・特色化を図り、教育の質を保証していくのかは分かりにくくなっています。

一方、各学部がイメージする卒業生像は統一性がなく、かつ、岡山大学の卒業生ならばこういう能力は持っているはずであるという、共通項的なものも明確にされていません。また、その質の保証システムも確立できていないのが現状であり、本学に対する社会的ニーズを満足させているとは言い難いのではないのでしょうか。したがって、今回のこの学士課程教育構築の取り組みにより、学生の学士力の保証、特に岡山大学のオリジナルな学士力の保証システムを構築し、「岡山大学の卒業生ならこれこれのことができる」、「岡山大学の卒業生はこのような能力をもっている」という認識を社会に定着させることが具体的な目的の1つであると考えています。

さらに、本取り組みによって、よりクオリティの高い学生に教育することが可能となりますので、本取り組み実行後は、社会に十分に通用する（質の保証された）学生を安定的に送り出すことができるようになります。すなわち、社会が安心して岡山大学卒の学生を受け入れる体制を作ることも、その目的の1つです。(図2)

3. 学士課程教育構築の取り組みによる達成目標

本学が掲げる教育の最終的な目標は、いうまでもなく一人ひとりの学生が岡山大学の卒業生にふさわしい学士力を身につけることですが、それは本取り組みを始めたからといって、簡単に達成できるものでは勿論ありません。社会に有為な人材を確実に送り出すことは、中長期的に取り組むべき課題であると考えます。本取り組みでは、学生たちが一定以上の学士力を獲得できるように、大学としての教育システムを確実に構築し、準備を万全に進めて、取り組み3年目の2012年度入学生からそれが十分期待できるというところを、先ずは目指しています。

4. 岡山大学における学士課程教育構築の特色

学士課程教育構築のため、学部では学位授与の方針（ディプロマポリシー：DP）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー：CP）及び入学者受入れの方針（アドミッションポリシー：AP）を明確に定めた上で、体系的なカリキュラムの整備とそれに沿った教育の実施を行いますが、それをより円滑に実施するための資料づくりを、本学が独自に構築するコンピュータシステムである「学士課程教育構築システム」で行います。このシステムは、学士課程教育構築を推進する原動力として各学部等に置く「ファカルティ・コーディネーター（FC）」と共に岡山大学の学士課程教育構築の大きな特色です。

この学士課程教育構築システムが稼働すれば、以下の事が可能になると考えております。

①学部・学科は

- ・ DPとカリキュラムとの関連性を把握
- ・ カリキュラムの見直しと体系化
- ・ 社会に対する学士力保証の客観的根拠の提示

②教員は

- ・ 授業内容・方法の改善

③学生は

- ・ 学士力評価チャート（学士力達成状況をチャート図で示すもの）による学士力の視覚的把握
- ・ 履修相談など学生と教員とのふれあいへの糸口

さらに、毎年度、学士力評価チャート等が提供されますので、その結果を点検・評価し、それを基に軌道修正された学士課程教育の改善が継続的に行われるとともに、法的に義務づけられている認証評価等への対応が容易になると考えます。

5. 学士課程教育構築の推進体制

本取り組みを円滑に推進させるために、以下の体制を整えています。

(1) 学士課程教育構築ワーキング・グループ（WG）

学士課程教育構築は、本来教育開発センターをはじめとする教育・学生支援機構で検討すべきですが、各学部等との綿密な連携が必要なため、学長のリーダーシップの下で組織的に取り組む必要があると考え、学長の直属組織である教育研究プログラム戦略本部に「学士課程教育構築WG」を設置し、中期目標・中期計画を実現するための具体的な方策を検討しています。

学士課程教育構築WGの検討結果は、ファカルティ・コーディネーター（FC）研修会で説明し、各学部等へはFCが伝える仕組みになっていますが、FC研修会の内容は、HPでも紹介しています（研修会の状況は録画し、ビデオ配信しています）。

岡山大学における学士課程教育構築の取り組みについては下記のアドレスで参照ください。

<http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/fc/fc-work.html>

(2) ファカルティ・コーディネーター（FC）

学士課程教育構築WGと各学部等との連携を図るため、各学部等から教育担当副学部長1名と事務職員1名以上の他、1学科1名以上の教員をFCとして選出頂いています。本取り組みには事務職員の協力が不可欠です。教職共同（教員、職員のそれぞれが持つ専門知識・経験を、学士課程の構築という共通の課題に向けて結集することが大切と考えます。）への足がかりになるよう事務職員にもFCへの就任をお願いしている次第です。FCの方々には学部運営組織と連携し、各学部のDP、CP等の作成作業やカリキュラム改善のリーダー的役割を担って頂く

こととなります。

(3) 学士課程教育構築システム

学士課程教育構築に当たり、学位授与方針、カリキュラム編成方針に基づいてカリキュラム・教育内容の抜本的見直しを行うとともに、個々の学生の能力を最大限引き出す教育プログラムを導入し、学生の学士力を向上させる仕組みを構築する必要があります。そのためには、学生へ提供する教育の内容と成果を可能な限り客観的な指標を用いて、可視化することが極めて重要であると考えます。

学士課程教育構築システムは、学士課程教育の内容と目標達成度の可視化を実現し、教育内容やカリキュラムの持続的な検証と改善を可能とする体制を構築するためのものです。

学士課程教育構築システムは、シラバス入力シ

テム及び学務システムと連動させ、カリキュラムマップの基礎資料となる「科目分布表」及び「科目分布チャート」を作成する科目分布システム、並びに学生のための学士力評価チャートを作成する学士力チャートシステムで構成されます。

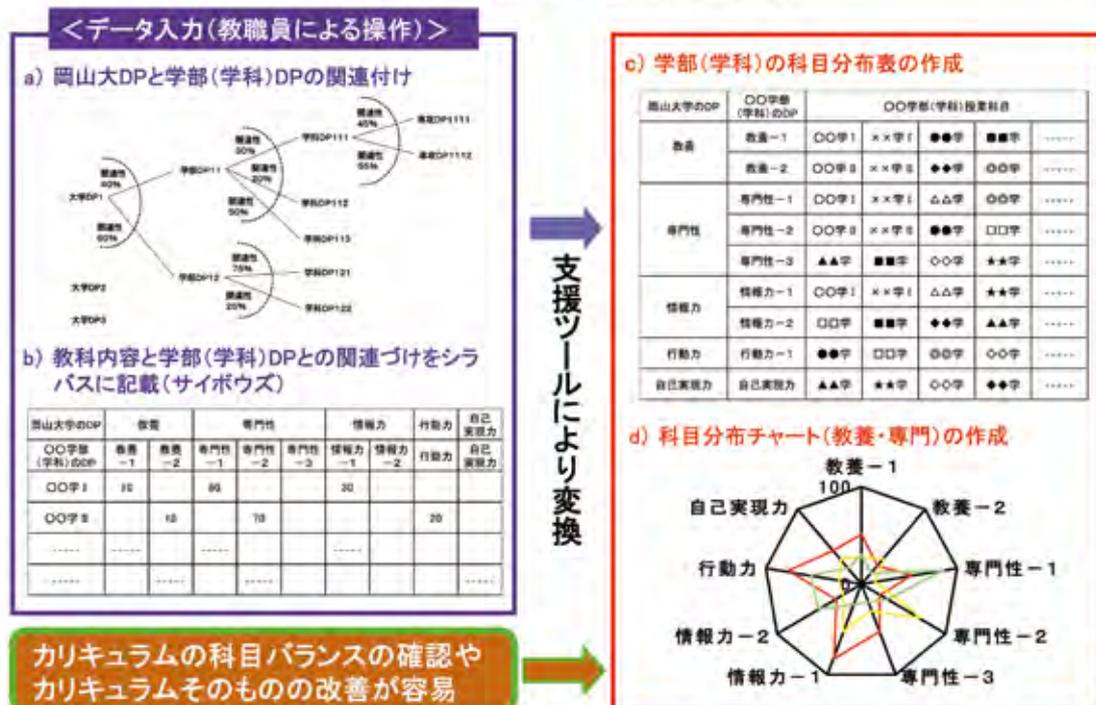
(4) 科目分布表及び科目分布チャート

カリキュラムマップの基礎資料となる科目分布表及び科目分布チャートは、科目分布システムにより作成され、学部・学科DPとその学部・学科が開講する授業科目との関連付けを可視化して表示します。

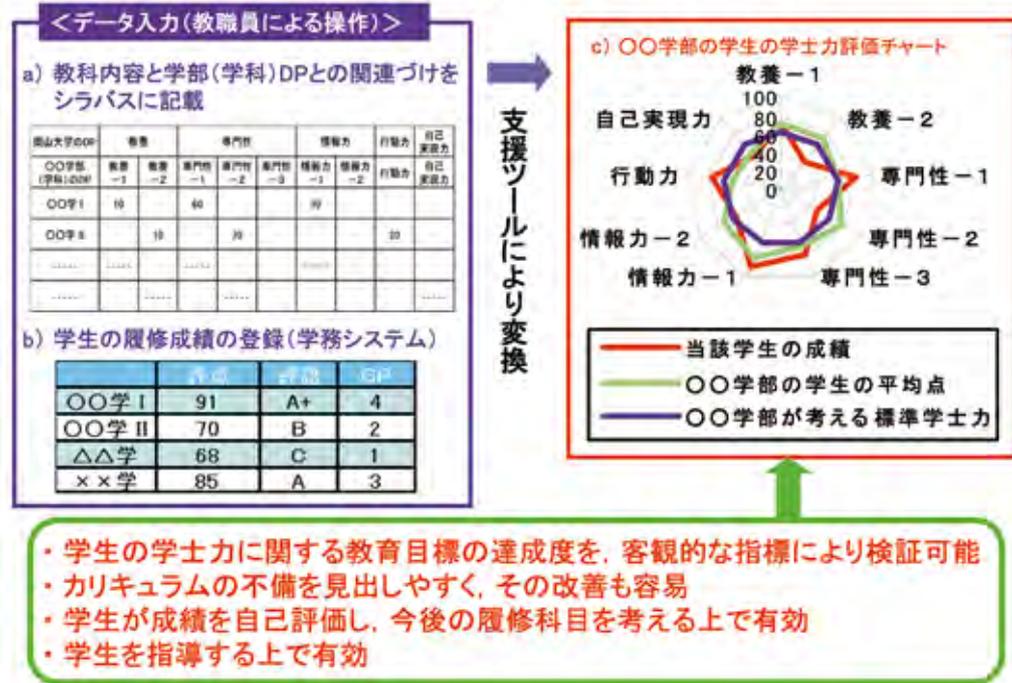
教員が、シラバス入力システム（サイボウズ・デジエ）を活用して、担当授業科目と学部・学科DPとの関連をシラバスに記載することにより、学部・学科ごとの科目分布表が作成できるシステムです。

(図3)

科目分布システムの概要



(図4) 学士力チャートシステムの概要



通常、カリキュラムマップを作成するには多大な時間と労力を要し、継続的にカリキュラムの改善を図るには教員にとって大きな負担となります。

本学が開発を進めている科目分布作成システムは、この難点を克服するものであり、授業科目の新設や改廃が、学部・学科DPに照らしてみた時、カリキュラム内容にどのように影響するかをコンピューター処理により即座に把握できることを目指しています。(図3)

(5) 学士力評価チャート

学士力評価チャートは学士力チャートシステムにより作成され、大学DPや学部・学科DPに関する学生の成績達成度をレーダーチャート等のグラフで表示するものです。

このシステムは、科目分布システムと学務システム(学生の単位取得状況の集計)に連動しており、一人ひとりの学生の学士力達成状況が一目で分かるようにしたものです。さらに、大学の全授業科目が大学

DP及び学部・学科DPと関連付けられていることから、学士力に関する教育目標の達成度を客観的な指標により検証することが可能となります。(図4)

6. 最後に

現在、学士課程教育構築を推進する上で重要な役割を果たすコンピュータシステムである「学士課程教育構築システム」がほぼできあがりました。しかしながら、本取り組みは学士課程教育構築システムの完成をもって終了するわけではありません。むしろ、学士課程教育構築のスタートラインに立った状況にあるというのが現実です。今後とも学士課程教育構築のため、学生諸君、教職員諸氏のご理解とご協力をお願いいたします。

最後に、本取り組み遂行のため大変ご努力頂いている学士課程教育構築WGの方々並びに各学部のFCの方々に感謝を表しつつ、この稿を閉じさせていただきます。



工学部再編とコース制の新体制

大学院自然科学研究科（工学部）教授
後藤 邦彰

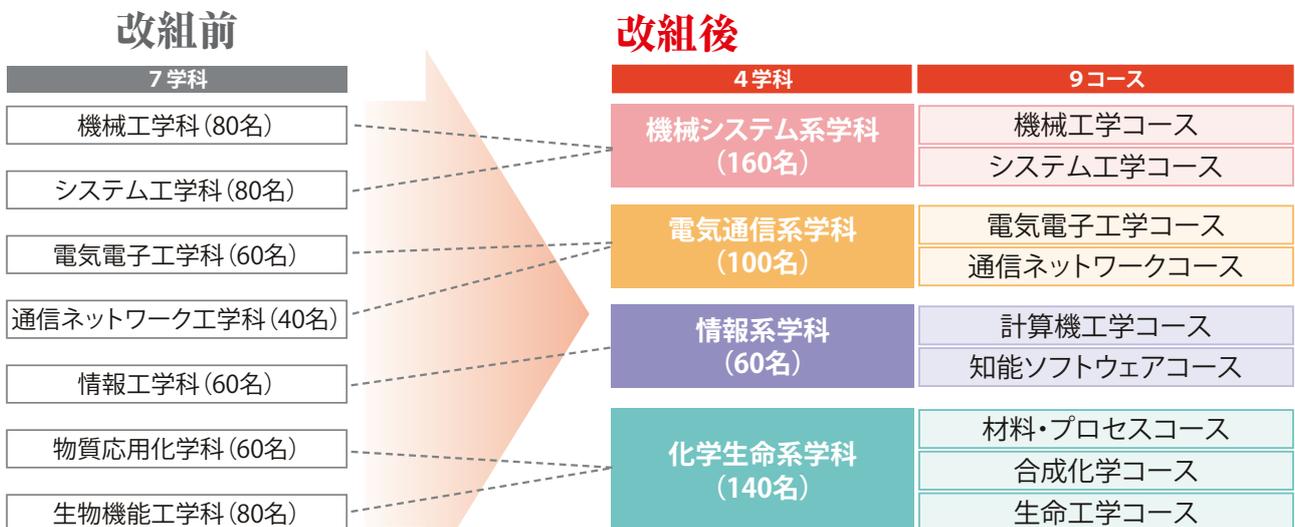
これまでホームページやパンフレットでお知らせしてきたように、2011年4月に工学部が改組します。もちろん2010年度以前に入学した皆さんのカリキュラムは従来どおりですが、4月に入学する新入生の皆さんからはカリキュラムなどが大きく変わります。ここでは、新しくなった工学部の概要をご紹介します。

2010年度まで、工学部は機械工学科、システム工学科、電気電子工学科、通信ネットワーク工学科、情報工学科、物質応用化学科及び生物機能工学科の合計7学科に分かれていました。これらが、機械システム系学科（＝機械工学科＋システム工学科）、電気通信系学科（＝電気電子工学科＋通信ネッ

トワーク工学科）、情報系学科（＝情報工学科）及び化学生命系学科（＝物質応用化学科＋生物機能工学科）の4学科になりました。つまり、工学部の改組は、図1に示すように、従来の学科の組み合わせを基本とした「再編」です。このように学科を大きな括りにすることで、それぞれが広い領域をカバーするようにして、まだ専門分野に関する詳細な情報をあまり持っていない受験生の学科選択を容易にしたいと考えました。

また、それぞれの学科は複数のコースにより構成されており、入学して、講義や演習、実験などを通して工学や技術の基本的知識を身につけた後の2年生の後期に、学生の希望に基づいて専門コースに分

（図1）改組の概要



（注）上記の正規入学定員以外に、工学部全体の第3年次編入学定員が30名。



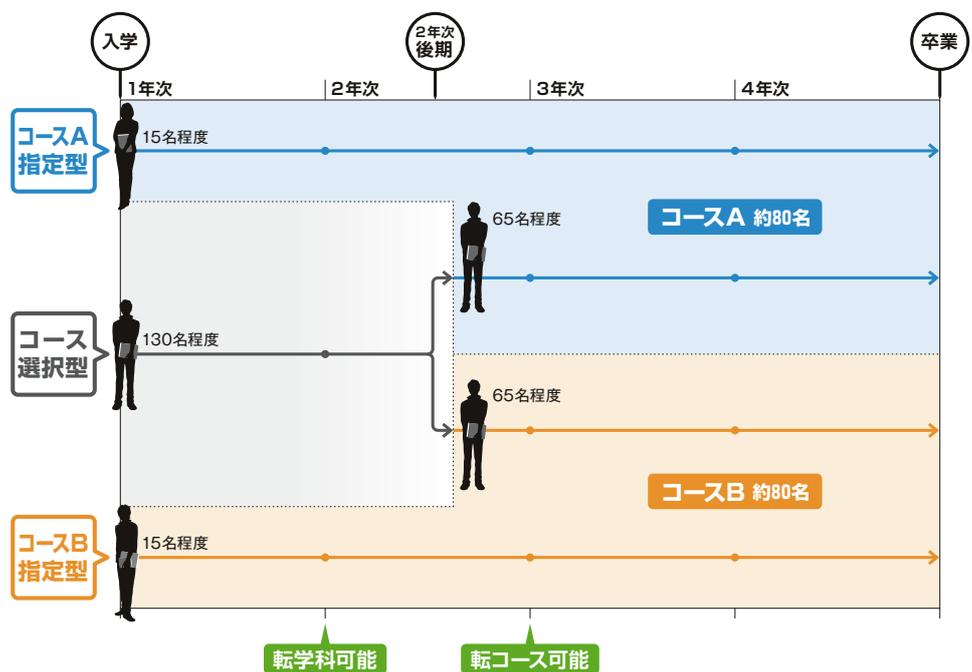
かれます。この専門コースは、一見すると旧来の学科に対応しているように見えますが、それぞれの学科が関与する主要な工学分野、産業分野に対応しています。

この専門コースへの配属は学生の希望に基づきますが、配属後の専門科目で行われる演習や学生実験などでどうしても許容人数が決まってしまうので、全員が希望どおりのコースに行けるとは限りません。このため、入学時点で勉強したい専門分野が明確に決まっている人は、コース配属時にならないと希望する勉強ができるかどうかわからないと思うかもしれません。このような入学時にコースの希望が明確な人のために、「コース指定型」というシステ

ムがあります。これは、一般入試前期日程および後期日程での入学者を対象に、入学試験成績上位者に対し配属されるコースを予約可能とするものです。

この他、ご紹介したい変更点が多数あります。また、それぞれの学科の特徴や、それぞれのコースの詳細もお伝えしたいのですが、それができるだけ紙面がありません。この改組に伴いホームページ (<http://www.eng.okayama-u.ac.jp/>) も一新し、新しくなった工学部の詳細な説明を公開しておりますので、一度立ち寄ってみてください。

(図2) 入学してから卒業までの進路構成



大学生活 10年目のメッセージ

山口 富治

東京理科大学基礎工学部 電子応用工学科 助教
2009年 大学院自然科学研究科産業創成工学専攻修了



岡山大学には学生として8年半、そして非常勤講師として半年の計9年間もお世話になりました。大学入学当時は、まさかこれだけの期間を大学で過ごすことになるとは思っていませんでしたが、研究の楽しさに魅せられ、ついつい長居をしてしまいました。

学生時代は、水素などのガス濃度を高精度に測るためのガスセンサーについて研究していました。学部4年生の時に研究室に配属されましたが、当時の研究室は新しくできたばかりで先輩がおらず、4年生だけで研究を進めていかなければなりませんでした。当然実験装置も一から製作したのですが、機械工作に関してはまったくの素人で、アクリルやステンレスなど加工にはずいぶん苦闘しました。私にとっては良い思い出ですが、大学の工作センターの方々には随分ご迷惑をおかけしたのではないかと考えると、ほんの少し申し訳なくも感じています。

卒業論文を執筆するに当たっても、資料や文献を必死に読みながら、実験データをどう解析すればよいか、冬休み中、頭を悩ませていた記憶があります。しかし、無い頭を使ってひねり出した結果の一部が学術論文誌に載ることになった時の嬉しさは、今でも忘れられません。この達成感や感動を味わっていたという気持ちが、その後自分の進む道を決めるきっかけとなりました。

現在は東京理科大学に移り、通算10年目の大学生活を送っています。新しい研究テーマとして水晶という材料を扱う研究をしていますが、これまでに扱った経験はゼロで、また一から知識を積み上げていかなければなりません。しかし、岡山大学での研究生活で培ってきた経験と、大学で勉強した材料物性の(わずかな)知識はきっと私の力になってくれ

ると思います。

ちなみに“東京”と付いていますが、私が所属している基礎工学部は、千葉県の野田市にキャンパスがあります。基礎工学部の学生を見て感じるのは、学生同士の横のつながりがとにかく強いということです。これは、基礎工学部が取り入れているユニークな教育のためだと思います。基礎工学部の1年生は、野田ではなく、遠く北海道にある長万部キャンパスで1年を過ごします。入学式の日には、彼らは大量の荷物を持って式場である日本武道館に現れます。そして、式を途中退場し、武道館の駐車場に待機した十数台のバスで羽田空港に向かい(途中フジテレビ社屋も少し見ることができるようです)、その日の夜には長万部キャンパスに到着します。

長万部キャンパスには学生寮があり、学生はその日から1年間、学科を問わず4人1部屋で共同生活を送ることになります。今回原稿を執筆するに当たり、長万部キャンパスでの生活について研究室の学生に聞いてみましたが、ここでは書ききれないほど話してくれ、長万部で得られるものの大きさを感じるとともに、彼らのつながりの強さに納得しました。人とのつながりというのは、自分を助け、また成長させてくれるものです。幸いにも、岡山大学には理科大以上に多くの学部・学科があり、また恩師の塚田啓二先生をはじめ素晴らしい先生方がいらっしゃいます。そのような恵まれた環境の中で、皆さんも同期の人たちとの横のつながりはもちろん、先輩や先生との縦のつながりをどんどん作っていったらいいと思います。そして、そのつながりをさらに長く紡いでいくことで、自分の人生を豊かなものにする力にしてください。

岡山大学を卒業された方に、
 本学在学生の方達へのメッセージをお願いしました。
 皆さんの大学生活に役立てていただければと願っています。

大学で過ごす瞬間（とき）

久保田 将弘

岡山大学事務職員 情報統括センター情報統括グループ
 2005年 工学部情報工学科卒業



『大学生の4年間はモラトリアム。人生で唯一、何もしていなくても、何をしていても、いい期間。』

気づけば岡山大学とのお付き合いもちょうど10年になりました。私は、香川県の県立高校を卒業し、2001年4月に工学部情報工学科に入学してから、学生として4年間、職員として6年間、岡山大学と共にしています。

私は、高校生の頃にやりたい事が見つかっていませんでした。「IT」という言葉が世の中で飛び交っていた頃で、「やりたい事が見つかった時に1つのスキルとして役に立つかな」という軽い気持ちで学部を選び、大学生活をスタートした事を思い出します。ただ、今振り返ると、岡山大学での学生生活は私を成長させ、今の自分の基になった「瞬間(とき)」だと感じています。

大学生活は経験の宝庫でした。私にとって、一般教養、研究室配属、サークル活動の3つが特に大きいですね。一般教養は、その名のとおり一般的教養を身につけるための科目であり、多分野の講義から好きなものを受講できます。自分の興味の趣くまま、論理学、くすりを考える、音楽の世界等を受講していました。年間1,000以上の講義が開講されていて、学ぶ楽しさを教えてくれた一般教養は、今でも受講したくてたまりません。

4年生で研究室に配属され、大学の醍醐味の1つである研究活動が始まったのですが、「未知。答えがない。」は大きな課題で、失敗経験や結果が出ない事への恐怖から、何度も自信を無くすことがありました。そんな時、「新しい分野にチャレンジしている私達には、無意味な失敗はない。」と指導教員から言葉をいただき、世界が変わった事を思い出します。今、

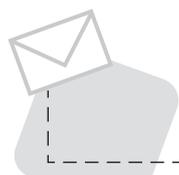
自分が自信を持ってTRYできているのは、この教えがあったからだと思います。

そして、私を人間的に成長させてくれたのが応援団総部吹奏楽団での活動でした。岡山大学の全11学部から、約200名のかげがえのない先輩・後輩との出会いがありました。例えば、工学部1年生の理系男子にとって、法学部4年生の女性は未知なる大人の女性でしたし、研究室仙人や、獲得単位が200を超える勉強熱心な人、また活動しすぎて8回目の春を迎えた人もいました。色々な人生・考え方・価値観を持っている人との出会いが、当時の私には大きな衝撃でしたし、意見をぶつけ合い、認め合いながら、音楽を中心とした様々な活動経験が、自分を大きく成長させてくれました。

現在はこれらの経験がつながって、岡山大学の職員として働いています。岡山大学を活気と魅力ある大学にし、岡山で、日本で、世界で活躍する岡大生(後輩達)を送り出したいと思っています。国立大学が法人化されて7年、学生の皆さんも、教職員や関係している様々な人達も岡山大学というフィールドで何でもチャレンジできる時代です。

大学生活では、挑戦できることは本当に無限大です。大学生活を思いっきり楽しんでください。何かをやってみようか悩んだらチャレンジしてみてください。全ての経験はあなたを作る糧となり、全ての選択はあなたの未来につながっています。

そう考えると、大学生活は「瞬間」と言えるのです。さあ、あなたはこの「瞬間」、何にTRYしますか？



海外の教育紹介

中国の教育制度



言語教育センター 准教授
孫 路易



中国では、隋代に始まって1300年以上も続いた「科挙」制度が1905年に廃止され、その後、近代的教育制度が確立されました。中華民国時代及び中華人民共和国成立から現在に至るまで中国の教育制度は、幾多の変遷を経ていますが、多様化がその特徴です。地域によってそれぞれの教育制度が異なり、教育制度を制定し実施する管理部門も一定ではありませんでした。1985年に「關於教育体制改革的決定」（「教育体制改革に関する決定」）が公布され、それからは各地で順次、9年間義務教育制度が実施され、現在は全国統一した教育制度が確立されつつあります。

一般に現代の教育制度は、初等教育、中等教育、高等教育の三等級に分けられていますが、それには基礎教育、職業教育、民族教育、民間教育などの個別教育が含まれています。

1. 初等教育

初等教育には、普通初等教育、特殊初等教育、及び成人初等教育があり、学校教育の初等段階として初歩的・基礎的な教育が行われています。

普通初等教育は、すなわち小学6年間の教育を指しますが、児童が、6歳か7歳になるとそのほとんどが居住する学区の小学校に入学し、5年か6年の教育を受けて卒業します。その教育課程の大枠は政府（教育部）が制定しますが、具体的な内容は各地域がそれぞ

れの状況に応じて策定しています。高学年で外国語の学習を行うのが一般的ですが、上海などの大都会の一部の小学校では、一年から英語を教えています。留年と飛び級の制度があり、卒業試験に合格して卒業が認められます。

特殊初等教育は、主に障害者児童の教育を指します。成人初等教育は、「掃盲」、つまり非識字者をなくすための教育で、成人の非識字者に国語と算数を教えています。

入学前の幼稚園、9年義務教育（6年小学と3年初級中学）、3年高級中学教育、特殊初等教育及び成人初等教育を併せて基礎教育と称する場合があります。民族教育制度として自治区での9年義務教育において「双語教学」、つまり中国語とその地域に居住する少数民族の言語とを両方教えることとなっています。

2. 中等教育

中等教育は、主に「初中」（初級中学）と「高中」（高級中学）を指しますが、職業教育も中等教育に属します。

小学卒業後、生徒のほとんどが居住する学区の中学校に進学し、義務教育の後半の3年か4年の教育を受け、物理、化学、政治などの科目も履修します。初級中学でも留年と飛び級の制度があります。卒業に際しては各地域で統一試験を行い、試験は6月に通常5科目か6科目で実施されます。この統一試験は、初級中

学の卒業試験であり、同時に高級中学の進学試験でもあります。その成績によって生徒の進学先の学校が決められます。

高級中学は日本の高等学校に相当し、修業年数は2年か3年です。履修科目に歴史や地理などの科目が追加され、小学や中学と同様に留年と飛び級の制度があります。卒業時に、統一試験はありませんが、生徒は自分の所属地域（省、直轄市、自治区）の共通試験に合格しなければなりません。

初級中学卒業後は、職業学校（3年）、技術学校（2～3年）、中等专业学校（3～4年）、成人业余中等学校（2～3年）への進学も認められています。それらの学校での教育は、職業教育と総称されています。生徒たちはそれらの学校で、農業・手工業などの専門知識を学びます。また、それらの学校に民間経営のものもあり、民間の職業学校では、民間教育として地域の伝統工芸などが教えられています。

3. 高等教育

高等教育は、主に大学教育を指します。大学教育には、「専科」（日本の短大に当たり、2～3年）、「本科」（4～5年）及び「研究生」（大学院であり、「碩士」つまり修士課程は2～3年、及び「博士」つまり博士課程は3～4年）の3つに分かれています。ほかに、成人高等教育学校として広播電視大学（放送大学）や夜間大学もあります。

「高中」卒業生には年に一度の「全国高等学校統一試験」を受ける資格があり、この統一試験がすなわち大学入学試験です。試験は毎年7月7日、8日、9日に全国で一斉に行われ、試験科目は、文系が国語、外国語（英語か日本語）、数学、総合（政治、歴史、地理）で、理系が国語、外国語（英語か日本語）、数学、総合（化学、物理、生物）です。受験生は、全国重点大学から3校、省や直轄市や自治区の重点大学から3校、非重点大学から3校、計9校の志望校を候補として選ぶことができます。さらに、学科志望として1校について3つの学科を候補として挙げるができます。配点は、それぞれ、国語、外国語及び数学が各150点、総合が300点の合計750点です。「本科」の合格

点は、地域によって異なりますが、合格ラインは350～400点以上とされています。民族教育制度として、少数民族の受験者に対しては、地元の大学に進学することを条件として10～20点を加算して優遇することもあります。

中華人民共和国成立から80年代までは、大学の学費は全額免除され、さらに医療費や宿泊費なども国が負担していました。1989年～1994年の5年間で、学費の公費化または自費化が進み、現在は自費が一般的です。北京や上海などの大都会では年間の学費がかなり高くなっています。非重点大学の学費は約4,200元～約5,000元（1元≒13円）であり、重点大学の場合は約5,000元～約6,000元です。

4. 中国の教育制度の問題点

中国の教育制度には様々な問題がありますが、特に深刻なのは大学の学費が高いということです。上記の学費に雑費や生活費などの支出を加えれば、学生一人当たりの年間出費はおおよそ都会で働く一般社員一人の一年分の収入に相当します。また、大学の学費は年々値上がりする傾向にあります。生徒の親が子供の学費を払えないことが原因で自殺するといった惨事が後を絶ちません。

政府や大学側が、奨学金や助学金などの救済制度を制定し、状況の改善を図ってはいますが、様々な原因で「貧困生」、つまり困窮生徒の現状は一向に改善されていません。



自学自習スペース利用のすゝめ

本学の一般教育棟A棟1階には、2009年4月1日から、「Waku²スクエア1」、「Waku²スクエア2」、「情報処理演習室兼自習室」及び「語学演習室兼自習室」などが設けられています。これらは学生の皆さんの自学自習を支援するためのスペースとして設置されました。

「Waku²スクエア」という名称は、学生・教職員教育改善委員会学生委員の意見を採用しており、「ワクワクする場所、ワークする（仕事＝勉強）場所、知識がワク（湧く）場所、意欲がワク（湧く）場所をイメージしており、『ワクワク』をローマ字でWakuの2乗として表現」しています。

Waku²スクエア1とWaku²スクエア2では、無線LAN、有線LANが設置されており、個人用のパソコンで快適なネットワーク環境が利用できま

す（学内LANの利用方法は、情報統括センターのホームページをご覧ください）。またWaku²スクエア1にはプレゼンテーションルームが併設されており、予約制ですが、プレゼンの練習・グループ学習・ディスカッション等に利用できます。

情報処理演習室兼自習室では、パソコンを使った自習のほかに、履修登録や単位取得状況の確認もできます。語学演習室兼自習室では、各国語の教材やDVD等により、語学力UPや語学検定試験対策の学習が可能です。各スペースの利用時間等は下記のとおりとなっています。

最後に、こうした自学自習スペースの利用は、空講義室を少人数で利用するよりも、エコにつながりますので、CO₂削減といった観点からも積極的にご活用ください。

自学自習スペース名称	Waku ² スクエア1	Waku ² スクエア2	情報処理演習室兼自習室	語学演習室兼自習室
場所	一般教育棟A棟1階	一般教育棟A棟別館1階	一般教育棟A棟1階	
座席数	72席	115席	59席	37席
利用可能日	平日	大学が定める期日を除く 通年	平日 ※ただし、授業等で使用している場合を除く	
利用時間	8:00~20:00 (※)	8:00~21:00	8:00~20:00 (※)	
利用についての注意・参考	・学生用プレゼンテーションルーム併設（グループ学習・ディスカッション等に利用できます。要予約） ・食事のみの利用は不可	・休日及び19:00以降は学生証により各自で解錠して入室 ・食事のみの利用は不可	・学生証により各自で解錠して入室	・学生証により各自で解錠して入室 ・入口でノートに所属・利用日時・利用教材名等を記入の必要有り
問い合わせ先	学務部学務企画課 (一般教育棟A棟2階)			

(※) 19:00以降は一般教育棟を施錠するため、入館不能。



Waku²スクエア2



情報処理演習室兼自習室



語学演習室兼自習室

編集後記

どういふ巡り合わせか、本誌の編集を担当することになりました。まだまだ若輩者ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本誌は、岡山大学で実施されている教養教育の現状と将来像を中心にコンパクトにまとめ、学生の皆さんに紹介することを目的とした、年1回発行の冊子です。活字が多くて、十分に理解できない内容もあろうかと思いますが、大学で学ぶことの意味を、自分自身で真剣に考えるきっかけとなれば幸いです。

「学び」は、人生を、そして心を豊かにしてくれる生涯の友人です。かく言う私も、今となってみれば、学生時代にもっと勉強しておけばよかった、と後悔し、少しでも取り返そうと書物を紐解く毎日です(汗)。

編集担当の一人として、できるだけ多くの方々が本誌を手にとって、目を通してくださいますようお願いしております。また、本誌の内容や編集に関する忌憚のないご意見を、広報専門委員会(gkikaku@adm.okayama-u.ac.jp)までお寄せください。いただいたご意見を参考にして、次号以降の編集に役立てていきたいと思ひます。

学務企画課 主査 八木 隆徳

編集担当

教育開発センター広報専門委員会

成松 鎮雄、橋ヶ谷 佳正、紀和 利彦、矢野 正昭、天野 憲樹、八木 隆徳

表紙図案構成監修

橋ヶ谷 佳正

学務部学務企画課

バックナンバー

- No.1 特集：「新カリキュラム・教務システムについて」
- No.2 特集：「上限制」
- No.3 特集：「授業評価アンケート」
- No.4 特集：「外国語教育の在り方」
- No.5 特集：「望ましい授業とは」
- No.6 特集：「成績評価の在り方」
- No.7 特集：「教養教育に求めること」
- No.8 特色G P 紹介、学生・教職員教育改善委員会活動報告 他
- No.9 新しくなる教養英語教育、現代G P 紹介 他
- No.10 20年度入学生から始まるGPA制度、特集：「大学ではこう学ぶ」 他
- No.11 学生支援の立場から見た教養教育、特集：「使ってみよう岡大eラーニング」 他
- No.12 アドミッションセンターの活動、特集「大学ではこう学ぶ」 他

上記は、OU-Voice ホームページ

<http://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/ou.html>

よりご覧いただけます。

OKAYAMA
UNIVERSITY



OKAYAMA UNIVERSITY

岡山大学 OU-Voice 第13号

編集・発行

岡山大学教育開発センター 広報専門委員会

所在地・連絡先

岡山市北区津島中2-1-1 〒700-8530

電話：086-252-1111（代表） Fax：086-251-8440

E-mail：gkikaku@adm.okayama-u.ac.jp